

カナダ研究の潮流(4)—フランス系カナダの研究

ケベックの`位置`に好著

デビッド・スミス

前 回予告した通り、今号ではフランス系カナダの政治と社会に関する英語の研究文献をご紹介します。この分野の研究は、大きく3つのカテゴリーに分けられる。

カナダ連邦とケベック

第1 は、連邦制におけるフランス系カナダの位置を論じた文献である。かなり古い研究になるが、Ramsay Cook著 *Canada and the French-Canadian Question* (Toronto: Macmillan, 1967)、同じくRamsay Cook編 *French-Canadian Nationalism: An Anthology* (Toronto: Macmillan, 1969)、およびPierre Trudeau著 *Federalism and the French Canadians* (Toronto: Macmillan, 1968) の3点は、それ以後の歴史の中でケベック州とカナダ全体の政治的焦点となったさまざまな問題や事件を理解する上で、その背景を明らかにしたものとして、研究史上ひとつのエポックをなしている。

ト ルドー氏は、この当時以来首相として、英仏語併用という公用語政策をとってきたが、トルドー首相のそうした政策とケベック党の勃興とによって、ケベック州の位置をめぐる緊張関係がますます注目されるようになった。(公用語政策は、Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism がそれ以前に行った調査研究との関連で理解する必要がある)。

二 うした傾向を反映した研究書としては、Christopher Beattie著 *Minority Men in a Majority Setting: Middle Level Francophones in the Canadian Public Service* (Toronto: McClelland and Stewart, 1975)、Richard Jones著 *Community in Crisis: French-Canadian Nationalism in Perspective* (Toronto: McClelland and Stewart, 1972)、Kenneth McRoberts and Dale Postgate著 *Quebec: Social Change and Political Crisis* (Toronto: McClelland and Stewart, 1980) などがある。

州内の政党政治

第2 のカテゴリーは、ケベック州の政党政治を研究した文献である。ケベック州における最近数年間の動きには、もちろんそれなりの社会的、政治的、経済的原因があるが、英語

系カナダ人にとってこうした動きが最も明白な形で現われるのは、選挙においてである。

ケ ベック州の政党政治は、研究テーマとして非常に面白く、研究書も少なくないが、最近、Herbert Quinn 著 *The Union Nationale: Quebec Nationalism from Duplessis to Lévesque* の改訂版 (Toronto: University of Toronto Press, 1979) や John Saywell 著 *The Rise of the Parti Québécois, 1967-1976* (Toronto: University of Toronto Press, 1977) などの刊行により、研究はさらに充実したものになった。

ケ ベック党が脚光を浴びる裏で、他の政党の行方も見落してはならない。この問題については、Michael Stein 著 *The Dynamics of Right-Wing Protest: A Political Analysis of Social Credit in Quebec* (Toronto: University of Toronto, 1973)、および同じテーマの秀作 Maurice Pinard 著 *The Rise of a Third Party: A Study in Crisis Politics* (Scarborough: Prentice-Hall, 1971) をあげておこう。

ケベック社会の分析

最 後の範疇に入るのが、ケベック社会を分析した研究である。これまで州外のケベック研究者は、この分野の研究書が手に入らないのを嘆いてきたが、最近ようやく英語による研究成果が出始めた。これは、まさに画期的なことといえる。たとえば、Henry Milner 著 *Politics in the New Quebec* (Toronto: McClelland and Stewart, 1978)、そして Sheila Arnopoulos と Dominique Clift の共著 *The English Fact in Quebec* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1980) などは、その好例である。

ケ ベック社会は、これまで常に少数者^{マイノリティ}と多数者^{マジョリティ}の問題を意識してきた。言語と政治の同一化は、この傾向に一層拍車をかけた。John Mallea 編 *Quebec's Language Policies: Background and Response* (Quebec: Presses d'Université Laval, 1977) など、州の言語立法に関する出版物の多さが、このことをよく示している。(カナダ講座担当客員教授)